



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 622 回 能とギリシャ悲劇

2015.9.29

大正末期から昭和初期にかけて、駐日フランス大使をつとめたポール・クローデル氏は、20世紀半ばのフランス文学を代表する作家で、ノーベル文学賞の候補者でもあった。太平洋戦争のまっただ中、日本が敗戦濃厚だった頃に、パリの晩餐会でこうスピーチしている。…「私がどうしても滅びてほしくない一つの民族があります。それは日本人です。あれほど古い文明をそのままに今に伝えている民族はありません」…ところが、その彼が能『熊野』を観て、「能とは死ぬほど退屈なものだ」と書いている記録がある。

クローデルは、ギリシャ悲劇を見るような気持ちで、能を見たに違いない。「熊野」は能の中でも、特にドラマ性の強い作品であるから、彼はそこに、テンポアップするドラマの展開を期待したのかもしれない。ところが、眼前の舞台はあまりにもゆったりと展開し、平然としたリズムは変わらず、激変し感動的なクライマックスは望めなかった。舞台設定も、オペラのような大道具のどんでん返しはなく、下手すると最後まで全く変わらない。恐らくクローデルは、すっかり期待外れで、肩透かしだったのだろう。東西の、文化の相互理解の難しさを物語ったエピソードである。

能は「仮面劇」と呼ばれ、ギリシャ悲劇と対比される。しかし、三人の立役・十五人の合唱隊全員が仮面を付けるギリシャ劇とは違い、能を構成する諸役のうち、ワキ方・囃子方・地謡・後見・子方は、絶対に能面をつけない。また主役であるシテも、「現在物」(＝舞台上が全部同一時代人で統一されている曲)の時は能面をつけていない。演劇が娯楽の対象になってくると、表情の固定した仮面では様々な人間感情を表現するには物足りなくなってきた。そこで顔に化粧をして役を勤めるようになるが、化粧とはつまり、自分が他の性格に変身するための手段で、仮面の一種なのである。そしてやがて、若い女性の役は若い女性が、老人の役は老人がと言う風に限定されてきた。ギリシャ悲劇はこれらをすべて仮面で表す。人間の喜怒哀楽、性別、老若をそれぞれの場面で、仮面を変えながらリアルに表現していく。しかし能は違う。能面の仮面に例のない傑作で、人間の顔以上の表現力を持っている。仮面の表情をより複雑に表現する為に、露骨な表現を避け、あえて中間的な表情を用いて表現を極端に抑制し、仮面をかけた演者の強い心を、その仮面を通して訴えかけるという方法で、多彩な表情表現を可能にする仮面を生み出している。「能楽」の面が芸術的価値の高い理由はここにある。面を下に向けることを「曇らせる」、憂い顔・泣き顔の表情を表らわす。逆に上に向けると「照らす」と言って明るい表情・微笑みを表し、角度を付けることによって遠くを見つめるようにも見える。実は能楽の仮面ほど表情豊かなものは他に無いのである。

能楽は演者と観客が一緒になって、先祖とか歴史とか宿命とかに向き合い、関係を取り結ぶ場になっており、観客も舞台の一部、だから能舞台では演者に拍手しないのが礼儀となっている。ギリシャ悲劇は演劇。しかし、日本の能はエンターテインメントではないかもしれない…今どきの日本人にもよく理解しがたい。益してや外国人には、頗る分かり難いことだろう。でも、「能」が2001年に我国第1号の「世界無形文化遺産」に認定された。